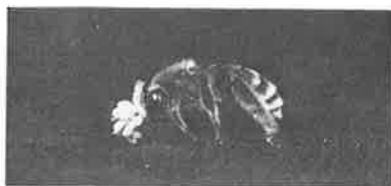


エビネの花粉媒介昆虫

石田源次郎・唐沢耕司

園内のエビネ栽培場において、昭和54年及び55年の開花期に、同種の昆虫が頭部にエビネの花粉塊をつけ、花を訪れていたのを観察したので報告する。

この昆虫は、ニッポンヒゲナガハナバチ *Tetralonia nipponensis* Pérezで、雄、雌とも飛来していた。昭和54年には、1個の花粉塊をつけニオイエビネを訪れた1個体を観察した。翌55年の開花期には数多く個体が訪花し、なかには数個の花粉塊をつけキシマエビネやニオイエビネを訪れているものが見られた。なお、訪花



エビネの花粉塊をたくさんつけた
ニッポンヒゲナガハナバチ(♀)



エビネの花を訪れたニッポンヒゲナガハナバチ(♂)
昆虫の同定は広島大学理学部小坂氏をわずらわした。小坂氏に厚くお礼申し上げます。

トクナガハモグリバエによる ナツエビネ果実の食害について

石田源次郎・磯部実

エビネの害虫のなかでもっともやっかいなトクナガハモグリバエは、普通春咲きエビネの新芽に入り花芽を食害するが、今回ナツエビネの果実のなかに入り食害していたのを観察したので記録する。

採種のため昭和55年11月中旬にナツエビネの果実を採集し、紙袋に入れ室内で乾燥させ、これを12月初旬に取り出したところ、紙袋のなかにトクナガハモグリバエの成虫と多量の糞がでてきた。いつ果実へ侵入し、成虫になったかは明らかではないが、栽培場では多数のナツエビネ果実が被害にあっていた模様で、羽化の際に果実を開けた穴の数を10果実について調べてみると、1果あたり多いものは11個、少ないもので1個開いており、平均では4.5個であった。ナツエビネと同じ場所で栽培しているエビネやキエビネなど春咲き種では、果実の被害が全く認められなかった。これは、おそらくナツエビネの開花期～子房肥大初期がちょうどトクナガハモグリバエの産卵期と合致したためで、この

時期には春咲き種の果実はすでに硬くなっており、産卵対象とならなかったものと見られる。トクナガハモグリバエの発生経過(回数)は不明であるが、ナツエビネから羽化した成虫が、すでにこの時期にできあがっている春咲き種の新芽(花芽)に産卵、越冬する可能性が高いと思われる。このことについては、今後、防除法とあわせてさらに検討を要する。



トクナガハモグリバエに食害された
ナツエビネ果実(中央付近にサナギ
の抜けガラが見える)



ナツエビネ果実からできた
トクナガハモグリバエ成虫